

ベニヤが光った ～ S 中学校伝説の掃除 ～

以下の文章は、ある先生が、「荒れている」という噂のあったご自分の母校に赴任したときのものです。その中学校は、翌年に校舎の改築が行なわれる予定でした。磨き込まれた廊下と生徒に"出会った"その先生は、噂とは異なる何かを感じます。

赴任初日、校舎を案内され、まだ解体されていない木造校舎を見たときには懐かしさがこみ上げてきた。同時に自分たちが中学校当時一生懸命に磨いた職員室の廊下が今も当時の輝きを保っていることが不思議に思えた。噂とは何か違う、早く生徒に会いたくなってきたのである。

入学式初日、在校生が登校してきた。出会う生徒は興味津々な顔つきであるが、口々に「おはようございます」と元気な挨拶をしてくれる。そして、手ぬぐいをしっかりと被り、腕まくりをして清掃をする生徒たちの表情は実にすがすがしい。見ると聞くとは大違いであった。松本・長野と回ってきたが、まだこんな素朴な生徒がいたのかと驚きさえ覚えた。

一・二年生の普通教室棟(中校舎)は先に解体するので封鎖され、プレハブ生活である。解体が間近に迫ると、何人もの生徒が封鎖された校舎に入りたいと教頭先生に談判に来る。中には担任まで巻き込んだ談判である。一目でも自分達の教室を見たい、自分の座っていた場所にもう一度行きたい、という訴えである。床ははがされて危険なので立ち入り禁止と言っても生徒には納得がいかないらしい。「私たちはこの木造校舎で卒業したい。新しい校舎はいりません。どうか工事を延期してください」と泣きながら校舎にすがりつく生徒の姿は、決して忘れることができない。

休日には旧校舎の写真を撮ろうと、地域だけでなく遠方からも何人もの人が本校を訪れてきた。旧校舎の床をくださいと申し出があったり、壊される日を聞かれたことも何度かあった。

解体前日、部活動が終わっても生徒たちはなかなか帰らないので見に行くと、何人かの生徒が鍵のかけられる普通教室棟へ入る入り口の戸にすがって泣いている。何という姿であろうか。何が彼女らをそうさせているのか、私にも旧校舎へ想いはあるが残念ながら彼女らほどの想いはなかった。

解体当日は陸上クラスマッチの日であったと記憶している。大きな機械が長い腕を伸ばして校舎に襲いかかる。バリバリと音を立てながら屋根や壁が壊れていく。呆然と立ちすくむ生徒と教職員。土手の上には解体を見守る人だかりができていく。校舎を補強した中央の鉄骨が最後まで解体を拒むが、巨大な解体機械の前には屈せざるを得なかった。がれきの山の上に立ちはだかる鉄のかたまりを見ながら静かに涙する生徒たち。それを不思議そうに見ている木造校舎に縁のなかった一年生。

職員室や三年生の教室のある北校舎は翌年の五月解体予定である。教師も生徒も残された木造校舎の床を必死になって磨いている。いたるところ丁寧に修理はされているが、床板を支える土台が腐っていてそこを通ると床がきしむ。しかし、鏡のように窓や壁を写し出す黒光りした床は、善光寺にある「びんずる」のように崇高に見える。

一・二年生はプレハブ生活にはいる。プレハブの夏は暑い。噂には聞いていたがこの暑さは経験したものでないとわからない。校舎に立てられたプレハブには板塀が張り巡らされ、風はまったく期待できない。直接日差しを受けた教室のスチールの教卓は、熱くて触れない。給食はまさに我慢大会となる。四十度を越す教室で保冷庫のない牛乳は直ぐに暖まり、スープは更に体を温める。五時間目の授業は最悪で、私はスライドが三年生の教室になることを祈っていた。今思えば、こうした暑さでもじっと座っての学習に耐えた生徒は立派である。



プレハブの床は、ベニヤ板で雑巾は一週間ともたないうちに穴があく。それでも磨く床を失った二年生はベニヤに向かう。一年生も見よう見まねで床を磨き出す。旧校舎への想いが床に伝わったのか、ベニヤ板が光り出してきた。来校した方が「ベニヤ板も磨けば光るんですね」と感心された。このプレハブも一年後には壊される。それでも磨き、鏡のようにベニヤが窓を写し出した。

現在のS中学校の校舎は、こうした歴代の先輩たちの熱い思いの上に建っているのですね。